夢殿

楠山正雄

一

むかし日本(にほん)の国(くに)に、はじめて仏(ほとけ)さまのお教(おし)えが、外国(がいこく)から伝(つた)わって来(き)た時分(じぶん)のお話(はなし)でございます。

第(だい)三十一代(だい)の天子(てんし)さまを用明天皇(ようめいてんのう)と申(もう)し上(あ)げました。この天皇(てんのう)がまだ皇太子(こうたいし)でおいでになった時分(じぶん)、お妃(きさき)の穴太部(あなとべ)の真人(まひと)の皇女(おうじょ)という方(かた)が、ある晩(ばん)御覧(ごらん)になったお夢(ゆめ)に、体(からだ)じゅうからきらきら金色(こんじき)の光(ひかり)を放(はな)って、なんともいえない貴(とうと)い様子(ようす)をした坊(ぼう)さんが現(あらわ)れて、お妃(きさき)に向(む)かい、

「わたしは人間(にんげん)の苦(くる)しみを救(すく)って、この世(よ)の中を善(よ)く

してやりたいと思って、はるばる西の方からやって来た者です。しばらくの間あなたのおなかを借りたいと思う。」

といいました。

お妃はびっくりなすって、

「そういう貴いお方が、どうしてわたくしのむさくるしいおなかの中などへお入りになれましょう。」

とおっしゃいますと、その坊さんは、

「いや、けっしてその気づかいには及ばない。」

と言うが早いか踊り上がって、お妃の思わず開けた口の中へぽんと跳び込んでしまったと思うとお夢は

さめました。

目がさめて後お妃は、喉の中に何か固くしこるような、玉でもくくんでいるような、妙なお気持ちでしたが、やがてお身重におなりになりました。

さて翌年の正月元日の朝、お妃はいつものように御殿の中を歩きながら、お厩の戸口までいらっしゃいますと、にわかにお産気がついて、そこへ安々と美しい男の御子をお生みおとしになりました。召使いの女官たちは大さわぎをして、赤さんの皇子を抱いて御産屋へお連れしますと、御殿の中は急に金色の光でかっと明るくなりました。そして皇子のお体から

は、それはそれは不思議(ふしぎ)なかんばしい香(かお)りがぷんぷん立(た)ちました。

お厩(うまや)の戸(と)の前(まえ)でお生(う)まれになったというので、皇子(おうじ)のお名(な)を厩戸皇子(うまやどのおうじ)と申(もう)し上(あ)げました。後(のち)に皇太子(こうたいし)にお立(た)ちになって、聖徳太子(しょうとくたいし)と申(もう)し上(あ)げるのはこの皇子(おうじ)のことでございます。

二

さて太子(たいし)はお生(う)まれになって四月(よつき)めには、もうずんずんお口をお利(き)きになりました。明(あ)くる年(とし)の二月(がつ)十五

日(にち)は、お釈迦(しゃか)さまのお亡(な)くなりになった御涅槃(ごねはん)の日でしたが、二歳(さい)になったばかりの太子(たいし)は、かわいらしい両手(りょうて)をお合(あ)わせになり、西(にし)の方(ほう)の空(そら)に向(む)かって、

「南無釈迦仏(なむしゃかぶつ)。」

とお唱(とな)えになったので、おつきの人たちはみんなびっくりしてしまいました。

太子(たいし)が六歳(さい)の時(とき)でした。はじめて朝鮮(ちょうせん)の国(くに)から、仏(ほとけ)さまのお経(きょう)をたくさん献上(けんじょう)してまいりました。するとある日(ひ)太子(たいし)は、天子(てんし)さまのお前(まえ)へ出て、

「外国(がいこく)からお経(きょう)がまいったそうでございます。わたくしに読(よ)ませて頂(いただ)きとうございます。」

とお申し上げになりました。
天皇はびっくりなすって、
「どうしてお前にお経が分かるだろう。」
とおっしゃいますと、太子は、
「わたくしはむかしシナの南岳という山に住んでいて、長年仏の道を修行いたしました。こんど日本の国に生まれて来ることになりましたから、むかしの通りまたお経を読んでみたいと思います。」
とお答えになりました。
天皇ははじめて、なるほど太子はそういう貴い人の生まれかわりであったのかとお悟りになって、お

経を太子に下さいました。

　太子が八歳の年でした。新羅の国から仏さまのお姿を刻んだ像を献上いたしました。その使者たちが旅館に泊っている様子を見ようとお思いになって、太子はわざと貧乏人の子供のようなぼろぼろなお姿で、町の子供たちの中に交じってお行きになりました。すると新羅の使者の中に日羅という貴い坊さんがおりましたが、きたない童たちの中に太子のおいでになるのを目ざとく見付けて、

「神の子がおいでになる。」

といって、太子に近づこうといたしました。太子は

びっくりして逃(に)げて行こうとなさいました。日羅(にちら)はあわてて履(くつ)もはかず駆(か)け出(だ)してお後(あと)を追(お)いかけました。そして太子(たいし)の前(まえ)の地(じ)びたにぺったりひざをついたままうやうやしく、

「敬礼救世(きょうらいぐぜ)観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)。妙教流通(みょうきょうるづう)東方日本国(とうほうにっぽんこく)。」

と申(もう)しますと、日羅(にちら)の体(からだ)から光明(こうみょう)がかっと射(さ)しました。そして太子(たいし)の額(ひたい)からは白(しろ)い光(ひかり)がきらりと射(さ)しました。日羅(にちら)の言(い)った言葉(ことば)は、人間(にんげん)の世(よ)の苦(くる)しみを救(すく)って下(くだ)さる観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)に、そしてこの度東(たびひがし)の果(は)ての日本(にほん)の国(くに)の王(おう)さまに生(う)まれて、仏(ほとけ)の教(おし)えをひろめて下(くだ)さるお方(かた)に、つつしんでごあいさつを申(もう)し上(あ)げま

すという意味でございます。

大きくおなりになると、太子は日羅の申し上げたように、仏の教えを日本の国中におひろめになりました。はじめ外国の教えだといってきらっていた者も、太子がねっしんに因果応報ということのわけを説いて、「人間のいのちは一代だけで終るものではない。前の世とこの世と後の世と、三代もつづいている。だから前の世で悪いことをすれば、この世でその報いがくる。けれどこの世でいいことをしてその罪を償えば、後の世にはきっと幸福が報ってくる。だからだれも仏さまを信じて、この世に生きている間たくさんいい

ことをしておかなければならない。」

　こうおさとしになりますと、みんな涙をこぼして、太子とごいっしょに仏さまをおがみました。けれど中でわがままな、がんこな人たちがどうしても太子のお諭しに従おうとしないで、お寺を焼いたり、仏像をこわしたり、坊さんや尼さんをぶちたたいてひどいめにあわせたり、いろいろな乱暴をはたらきました。太子はその人たちのすることを見て、深いため息をおつきになりながら、

「しかたがない、悪魔を滅ぼす剣をつかう時が来た。」

とおっしゃって、弓矢と太刀をお取りになり、身方

の軍勢のまっ先に立って勇ましく戦って、仏さまの敵を残らず攻め滅ぼしておしまいになりました。

こうしてこの太子のお力で、いろいろの邪魔を払って、仏さまのお教えがずんずんひろまるようになりました。摂津の大阪にある四天王寺、大和の奈良に近い法隆寺などは、みな太子のお建てになった古い古いお寺でございます。

三

太子のお徳がだんだん高くなるにつれて、いろいろ

不思議な事がありました。ある時甲斐の国から四足の白い、真っ黒な小馬を一匹朝廷に献上いたしました。太子はこの馬を御覧になると、たいそうお喜びになって、

「この馬に乗って国中を一めぐりして来よう。」

とおっしゃって、調使丸という召使いの小舎人をくらの後ろに乗せたまま、馬の背に乗って、そのまますうっと空の上へ飛んでお行きになりました。下界では、

「あれ、あれ。」

といって騒いでいるうちに、太子はもう大和の国原をはるか後に残して、信濃の国から越の国へ、越の国

からさらに東の国々をすっかりお回りになって、三日の後にまた大和へお帰りになりました。この時太子のお歩きになった馬の蹄の跡が、国々の高い山に今でも残っているのでございます。

またある時、太子は天子さまの御前で、勝鬘経というお経の講釈をおはじめになって、ちょうど三日めにお経がすむと、空の上から三尺も幅のあるきれいな蓮花が降って来て、やがて地の上に四尺も高く積りました。その蓮花を明くる朝天子さまが御覧になって、そこに橘寺というお寺をお立てになりました。

またある時、日本の国からシナの国へ、小野妹子という人をお使いにやることになりました。その時太子は妹子に向かい、

「シナの衡山という山の上のお寺は、むかしわたしが住んでいた所だ。その時分いっしょにいた僧たちはたいてい死んだが、まだ三人は残っているはずだから、そこへ行って、むかしわたしが始終つかっていた法華経の本をさがして持って来ておくれ。」

とおっしゃいました。

妹子はおいいつけの通り、シナへ渡るとさっそく、衡山という所へたずねて行きました。そしてその山

の上のお寺へ行くと、門に一人の小坊主が立っていました。妹子がこういう者だといって案内をたのみますと、小坊主はもう前から知っているといったように、

「和尚さん、和尚さん、思禅法師のお使いがおいでになりましたよ。」

といいました。するとお寺の中から腰の曲がったおじいさんの坊さんが三人、ことこと杖をつきながら、さもうれしそうにやって来て、太子の御様子をたずねるやら、昔話をするやらしたあとで、妹子のいうままに、一巻の古い法華経を出して渡しました。妹子は

それを持(も)って、日本(にほん)へ帰(かえ)ったということです。

四

太子(たいし)のお住(す)まいになっていたお宮(みや)は大和(やまと)の斑鳩(いかるが)といって、今(いま)の法隆寺(ほうりゅうじ)のある所(ところ)にありましたが、そこの母屋(おもや)のわきに、太子(たいし)は夢殿(ゆめどの)という小(ちい)さいお堂(どう)をおこしらえになりました。そして一月(ひとつき)に三度(ど)ずつ、お湯(ゆ)に入(はい)って体(からだ)を浄(きよ)めて、そこへお籠(こも)りになり、仏(ほとけ)の道(みち)の修行(しゅぎょう)をなさいました。

ある時(とき)太子(たいし)はこの夢殿(ゆめどの)にお籠(こも)りになって、七日七夜(なのかななよ)

もまるで外へお出にならないことがありました。いつもは一晩ぐらいお籠りになっても、明日の朝はきっとお出ましになって、みんなにいろいろと尊いお話をなさるのに、今日はどうしたものだろうと思って、お妃はじめおそばの人たちが心配しますと、高麗の国から来た恵慈という坊さんが、これは三昧の定に入るといって、一心に仏を祈っておいでになるのだろうから、おじゃまをしないほうがいいといって止めました。

するとちょうど八日めの朝、太子は夢殿からお出ましになって、

「先だって小野妹子の取って来てくれた法華経は、衡山の坊さんがぼけていたと見えて、わたしの持っていたのでないのをまちがえてよこしたから、魂をシナまでやって取って来たよ。」

とおっしゃいました。

その後また小野妹子が二度めにシナへ渡った時、衡山のお寺を訪ねると、前にいた三人の坊さんの二人までは死んでしまって、一人だけ生き残っておりましたが、その坊さんの話に、

「先年あなたのお国の太子が青い龍の車に乗って、五百人の家来を従えて、はるばる東の方から雲の上

を走っておいでになって、古い法華経の一巻を取っておいでになりました。」

と言ったそうでございます。

五

太子のお妃は膳臣の君といって、それはたいそう賢くてお美しい方でしたから、御夫婦のお仲もおむつましゅうございました。ある時ふと太子はお妃に向かって、

「お前とは長年いっしょにくらして来たが、お前はた

だの一言もわたしの言葉に背かなかった。わたしたちはしあわせであったと思う。生きているうちそうであったから、死んでからも同じ日に、同じお墓の中に葬られたいものだ。」

とおっしゃいました。お妃は涙をお流しになりながら、

「どうしてそんな悲しいことをおっしゃるのでございますか。このさき百年も千年も生きていて、おそばに仕えたいと、わたくしは思っているのでございますのに。」

とおっしゃいました。けれども太子は首をおふりに

なって、

「いやいや、初めがあれば終りのあるものだ。生まれたものは必ず死ぬに極まったものだ。これは人間の定まった道でしかたがない。わたしもこれまでいろいろのものに姿をかえ、度々人間の世に生まれ変わって来て、仏の道をひろめた。とうとうおしまいにこの日本国の皇子に生まれて来て、仏の道の跡方もない所に法華の種を蒔いた。わたしの仕事もこれで出来上がったのだから、この上永く、むさくるしい人間の世の中に住んでいようとは思わない。」

としみじみとお話をなさいました。お妃はなおな

お悲(かな)しくおなりになって、とめ度(ど)なく涙(なみだ)がこぼれて来(き)ました。

ちょうどそのころでした。太子(たいし)は摂津(せっつ)の国(くに)の難波(なにわ)のお宮(みや)へおいでになって、それから大和(やまと)の京(きょう)へお帰(かえ)りになるので、黒馬(くろうま)に乗(の)って片岡山(かたおかやま)という所(ところ)までおいでになりますと、山の陰(かげ)に一人(ひとり)物(もの)も食(た)べないとみえて、見(み)るかげもなく、痩(や)せ衰(おとろ)えたこじきが、虫(むし)のように寝(ね)ていました。お供(とも)の人たちは、太子(たいし)のお馬先(うまさき)に見苦(みぐる)しいと思(おも)って、あわてて追(お)いたてようとしますと、太子(たいし)はやさしくお止(と)めになって、食(た)べ物(もの)をおやりになり、情(なさ)けぶかいお言葉(ことば)をおかけになりました。そして帰(かえ)り

しなに、
「寒(さむ)いだろうから、これをお着(き)。」
とおっしゃって、召(め)していた紫色(むらさきいろ)の御袍(おうわぎ)をぬいで、お手(て)ずからこじきの体(からだ)にかけておやりになりました。
その時(とき)、

「しなてるや
片岡山(かたおかやま)に
飯(いい)に飢(う)えて
臥(ふ)せる旅(たび)びと
あわれ親無(おやな)し。」

という和歌(わか)をお詠(よ)みになりました。

「しなてるや」というのは、片岡山(かたおかやま)という言葉(ことば)に冠(かぶ)せた飾(かざ)りの枕言葉(まくらことば)で、歌(うた)の意味(いみ)は、片岡山(かたおかやま)の上に御飯(ごはん)も食(た)べずに飢(う)えて寝(ね)ている旅(たび)の男(おとこ)があるが、かわいそうに、親(おや)も兄弟(きょうだい)もない、かなしい身(み)の上(うえ)なのであろうかというのです。

するとその時(とき)、寝(ね)ていたこじきが、むくむくと頭(あたま)をあげて、

「斑鳩(いかるが)や
富(とみ)の小川(おがわ)の
絶(た)えばこそ
我(わ)が大君(おおきみ)の

御名を忘れめ。」

と御返歌を申し上げたといいます。

歌の中にある「斑鳩」だの、「富の小川」だのというのは、いずれも太子のお住まいになっていた大和の国の奈良に近い所の名で、その富の小川の流れの絶えてしまうことはあろうとも、太子さまの今日のお情けをけっして忘れる時はございませんというのでございます。

さて太子は奈良の京へお帰りになりましたが、その後で片岡山のこじきは、とうとう死んでしまいました。太子はそれをお聞きになって、たいそうお嘆きに

なり、手(て)あつく葬(ほうむ)っておやりになりました。それを聞(き)いた七人(にん)の大臣(だいじん)が、太子(たいし)さまともあるものがそんな軽々(かるがる)しい事(こと)をなさるとはといって、やかましく小言(こごと)を申(もう)しました。太子(たいし)はその話(はなし)をお聞(き)きになると、七人(にん)の大臣(だいじん)を呼(よ)び出(だ)して、

「お前(まえ)たちはそんなむずかしいことをいっていないで、まあ片岡山(かたおかやま)へ行ってごらん。」

とおっしゃいました。

大臣(だいじん)たちはぶつぶつ言(い)いながら、ともかくも片岡山(かたおかやま)へ行ってみますと、どうでしょう、こじきのなきがらを収(おさ)めた棺(ひつぎ)の中は、いつか空(から)になっていて、中からは

ぷんとかんばしい香りが立ちました。大臣たちはみんな驚いて、太子も、このこじきも、みんなただの人ではない、慈悲の功徳を世の中の人たちにあまねく知らせるために、尊い菩薩たちがかりにお姿をあらわしたものだろうと思うようになりました。

六

さてこのことがあってから後間もなく、太子はある日お妃に向かい、

「いよいよ、いつぞやの約束を果たす日が来た。わた

したちは今夜限りこの世を去ろうと思う。」
とお言いになりました。

そして太子とお妃とはその日お湯を召し、新しい白衣にお着替えになって、お二人で夢殿にお入りになりました。

明くる日の朝、いつまでもお二人ともお目ざめにならないので、おそばの人たちが不思議に思って、そっと御堂の中に入ってみますと、お二人はまくらを並べたまま、それはそれは安らかに、まるでいつもすやすやお休みになっているような御様子で、息を引き取っておいでになりました。お体からはぷんと高く、か

んばしいにおいが立ちました。太子のお年は、四十九歳でございました。

太子のおかくれになった日、シナの衡山からとっておいでになった古い法華経も、ふと見えなくなりました。それもいっしょに持っておいでになったのだろうということです。

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社
１９８３（昭和58）年６月10日第1刷発行
入力：鈴木厚司
校正：今井忠夫
２００４年1月６日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。